毛呂山を医療・福祉の町に

リーダー

患者本位の病院へ改革

丸木清浩埼玉医大理事長

毛呂駅の山側に聳え立つ埼玉医科大学。もともとは丸木家の個人病院だったが、昭和四十七年に県の後押しで医科大学となり、現在では複数の病院、社会福祉施設も経営する一大医療グループを成している。四月には日高市に新たにがん、心臓病など専門の「国際医療センター」を開く。率いる丸木清浩理事長に、医療に取り組む考え方などを聞いた。

毛呂山町のＪＲ八高線

▼県知事が初代理事長

―ご出身は毛呂山ですか。

丸木　この町で生まれ小学校まで通い、中学校から東京に出ました。医学部を出て精神医学の医師となって、慶応病院などに勤務していました。

―それが、結局毛呂山に戻られた。

丸木　父(丸木清美)がこちらの病院をやっていましたが、埼玉県で医科大学を作ろうという話が持ち上がり、私も手伝わないわけにいかなくなりまして、昭和四十五年ごろこちらに帰ってきたんです。

―お父さんから大学を引き継いだわけですね。

丸木　初代の大学理事長は栗原県知事におやりいただき、その後父が引き継ぎ、平成六年に父が体調を崩し私が継ぎ現在に至っています。

―もともと明治時代から毛呂病院という病院があったそうですが。

丸木　明治二十五年に丸木清太郎が設立し、戦後まで個人病院でした。昭和二十二年に八高線の転覆事故があり百八十人くらい亡くなったんですね。負傷者がこちらにみんな運ばれました。私も子供心に覚えています。これで父はもっと医療を近代化しなければと考え、私的な病院から、二十七年に社会福祉法人を発足させたんですよ。

―その後、県と一緒に大学設立に至るわけですが。

丸木　当時も埼玉県はお医者さんや看護婦さんが不足し、いずれは医療関係者の育成をしなければと考えていたんです。最初は看護婦さんの養成校を作り、そのうちに一県一医科大学構想が田中内閣の時にできて、それなら埼玉でもと準備に入ったということです。自然な流れだったんですよ。

―病院としては現在三ヶ所ですか。

丸木　埼玉医大の病院は、現在はこちら(毛呂山)の埼玉医科大学病院と、川越の総合医療センターの二つ、もう一つはかわごえクリニックという診療所を持っています。

それから今度、四月から国際医療センターということで、日高市に六百床の病院を開設します。

―医療だけでなく福祉関係の事業も一緒に運営されているんですね。

丸木　埼玉医大の母体である毛呂病院は、元々精神科が中心でしたが、精神科というのは、精神発達の遅れたお子様とかをお預かりする立場にあるんです。障害者をお持ちのご家族が大変だということから、施設を作らなければという話になってしまうんですね。二十七年に精神薄弱者施設として社会福祉法人育心会も設立しました。

自然といろいろなものに拡大しましてね。今は毛呂病院が多少医療的な要素が強く、育心会が福祉的要素の強い福祉事業を運営しています。

▼満足度の高い教育

―教育、医療にどのようなお考えで取り組んでおられるのですか。

丸木　基本的に三つあると考えています。第一に、教育機関ですから、学生には満足度の高い教育を提供するということですね。ステューデント・オリエンテッドの大学にするということです。今までの日本の教育機関の歴史では、はっきり言いまして、旧帝国大学を含めて学生さんの教育を軽視する傾向がありました。私どもは学生教育を大事にし、すべての力をそこに傾注していくつもりです。

二つめは、医科大学ですから付属病院に患者さんがお見えになります。患者さんには安全で安心できる満足度の高い医療を提供する、ということです。これは、徹底したペイシェント・オリエンテッドの病院を作りあげていくと、いう考え方なんです。そのことができる病院が、教育施設としても最もよいんだという考え方を私はしています。

もう一つは、働いている教職員がいますので、安心して働ける職場を提供するということです。

―学生さんを満足させる教育の実現のため、具体的に実践されていることは。

丸木　教授法、教授内容、学生の評価などについてみんなで共有し、同じ考え方で取り組まねばならないということで、三年ほど前に医学教育センターを設置しました。ここの主催で毎年、少人数で教育方法の研修を泊りがけでやります。新任教員は必ずその課程を経なければならない。こんなことは他の大学ではやっていないと思いますが…。

―学生による教員の評価も取り入れられている。

丸木　自分も短期大学で特別講義(医学概論)を受け持っており評価されているんです。

▼講座制をやめる

―患者本位の医療についても具体的に説明していただけますか。

丸木　患者本位というと、親切だとか、コンフォタブルだとか、きちんと説明する、とか一般的には言われていますが、そういうことだけではないと思うんです。

患者さんは病気で来るわけですから、最もよい(診察・治療)システムを提供することだと思います。私も三十二、三年前、死ぬだろうと言われた病気をしたんです。たびたび入院しまして、病院はこういうことでいいのかと感じました。たとえば、主治医が誰かで(治療の成果が)違ってきます。腕のいい主治医に当たれば具合がいいですが、そうでないと…。そういうことがあってはいけないんです。

―具体的にどのようなシステムを作るべきだと。

丸木　大学には昔の講座制度というのがあり、ドイツ流で、縦系列に割れているわけです。お互いに独立性が強く、意見を言えない。これが、医療が進歩するなかで患者さんに適切な治療ができるシステムなのかどうか。そこで、従来の講座制はやめようと。教育・研究と診療を別にして、コラボレーション(協働)をやらなければいけないところは自由にできるようにしようと。たとえば、患者さんを、外科と内科の人が一緒に診ましょうということです。

―病院を大学講座から独立させたそうですが。

丸木　四月に組織改革をし、付属病院の臨床のお医者さんは院長の直属にしたんです。今までは大学の直属だったんです。本当に必要な人が患者さんの幸せのために、リベラルに手を組めるようにしました。

▼三大生活習慣病対応の国際医療センター

―二〇〇六年四月に新しく保健医療学部を日高キャンパスに開かれましたが。

丸木　保健医療学部は看護師さん、理学療法士、臨床検査技師さんなどいろいろなコメディカルの人を育成する学部です。医学部も日高に引越しする予定だったのですが、今は別になっています。

建設中の国際医療センター

私は、医学部の学生もいろんな職種と交流をさせ、社会的に勉強させようと思っているんですよ。また看護師、臨床検査技師、臨床工学士なども、できるだけお互いの仕事を理解しなければいけない。

―国際医療センターはどんな施設ですか。

丸木　六百床の病院です。三百床が包括的がんセンター、「包括」というのは予防から家庭復帰まで、それから研究までやるという意味でつけています。

他は、心臓病センターが二百床。これは心臓内科、外科、重症心不全のパートから成っています。あと百床は、救命救急センター。その中にはサブセンターとして、脳卒中センターがあります。国際医療センターは、総合的な、三大生活習慣病対応の病院なんです。

―そこで患者本位のシステムを導入する。

丸木　必要な患者さん一人一人に、必ずチームを組んで、相談しながら治療を進めていく。また患者さんがあまり動かないで、むしろ医者や看護師さんが動いてもらって診断や治療をするようにします。

―新しい病院で目ざす理想の医療に一歩近づくということですね。

丸木　まず国際医療センターでパイロットとして(改革を)やってみて、そのことが残った二つの病院によい影響を与えるようになってほしいなと思います。やはり既設の組織の中で改革をするのは本当に難しいんです。入れ物が変わらないと。

▼医療改革は慎重に

―政府が進める医療制度改革に一言。

丸木　私も、医療費が膨張し保険制度がもたないということは望ましくない、とは思います。しかしあまり性急に進めることで、医療を受ける患者さん、あるいは医療を担っている人たち、に問題が起き過ぎることがあってはならない。なぜなら、医療とか福祉は欠くことのできないセイフティネットだからです。

一所懸命取り組んでいる医療人が、その善意とか努力を空しく思うことになるとすれば、医療界がものすごくモラルダウンするだろうと思うんです。モラル低下が続きますと、後継者もよい人が出てこなくなり、それを復活するのは不可能になります。

―ただ一方で医療を取り巻く財政は厳しい。

丸木　だったら消費税増やしてもよいから医療や福祉に回すと。それは、お医者さんがぜいたくな生活に使うのはだめですよ。やはり医療者の方も反省しなければならない点はあるでしょう。しかし現状は、そんなゆとりはないです。公立病院はほとんど赤字、私的病院も赤字、大学病院もうちらでも赤字寸前、補助金をもらってやっと経営しているんですよ。

▼医療・福祉施設を集積

―県議として、地域の状況をどう見ていますか。

丸木　絶望的な思いです。地域のインフラ整備に手が回らないほど財政状況は厳しくなっている。若い人はいなくなり、年寄りばかりになってきました。

そこから、どう作り上げていくのかと考えると、やはりこれから高齢社会になるんですから、年寄りが中心になって、生きがいをもって、生きられるようなことを考えていかねばならない。私のところは大学、医療機関、福祉事業もやっており、県の人に、これも一つの産業ですよと申し上げるんです。集積するようにしたらよいのではと。ところが今は地域医療計画だとか、県全体を同じように金太郎飴にしたいという考え方があるわけですよ。

そうではなくて地域の強みを生かして、福祉、医療施設を集積すれば、患者さんが集まる。いい人材も集まる。そういうことをおやりになるとよい。突出させないで均一化しようとするからどれもがだめになってしまう。

私は私なりに、できるところは突出しようと思っているんですよ。心臓病のこれはうちです、たとえば移植ならうちがやるよと、となれば日本中から人が来る。患者さんの家族も泊まるでしょう。

いろんな産業もできますよ。若い人だって勤め先ができます。年寄りだっていろんな仕事ができるんですよ。それに、医療施設、福祉施設があれば年寄りは安心でしょう。それで住み着く人もいるんです。そういうあり方もあるんだと思います。

この町は、うちをもっと利用して起爆剤に使うといいと思いますけどね。私の口から言うと、我田引水に聞こえて調子がよくないですが…。

◎経歴　昭和14年生まれ、36年東京大学教養学部修了、42年慶応大学医学部卒業、47年埼玉医科大学理事、平成３年埼玉県議会議員、６年埼玉医科大学理事長、毛呂病院理事長
◎座右の銘　「一隅を照らす」
◎趣味　読書(「池波正太郎にはまっている。人生の達人だと思います」)、音楽、ゴルフ。
◎好きな女優　八千草薫
◎家族　妻、多恵子さん(毛呂病院院長)。２人のお子さん(一男一女)は独立。